



さすけねえぶる南会津水引の里

会長 五十嵐 恵子さん (水引)

閑静な山間に、茅葺き屋根の家屋が立ち並ぶ。誰もが「どこか懐かしい」と感じる日本の原風景を、今なお残す水引集落。集落の中心を走る県道を進むと、一人の女性と出会いました。

それは、五十嵐恵子さん。集落の世帯とNPO法人などで組織する「さすけねえぶる南会津水引の里」の会長を務めています。今年4月に設立されたばかりの当会。活動を始めた最大の目的は、集落が育んできた良好な景観を、次の世代へ引き継いでいくこと。景観を保全し、文化を守りながら、地域の活性化を目指しています。

人との「つながり」に 救われた記憶

五十嵐さんのご自宅も、茅葺き屋根の古民家。その趣を生かした民宿「離騒館」を営んでいます。夫の死後、仕事と子育てを両立できる暮らしの在り方を模索していたとき、民宿の経営を思い立ちました。平成12年の開業から女手一つで、宿を切り盛り。

開業当初は、慣れない接客に奔走する毎日でしたが、田代山登山や溪流釣りなど、自然環境を求める方と出会い、新しい「つながり」が生まれる―それが家族の助けとなり、支えでもありました。

過去の体験から「つながり」がもたらす可能性を強く意識した五十嵐さん。交流の輪を、一軒の民宿で完結させるのではなく、集落全体ひいては館岩地域全体に波及させることはできないか―との考えに至ります。

子どもたちとの交流に まずは焦点を当てる

町が誘致を進める教育旅行の受け入れにも、黎明期から参画。国内外を問わず、数多くの子どもたちと関わり、集落の魅力を伝えてきました。

いわゆる都会での生活は「モノの豊かさ」の恩恵を受け、不自由のない環境が当たり前。しかし、利便性を追求した生活がすべてではありません。

のどを潤すために清水を汲む、暖を取るために薪を割る。集落が営む、昔ながらの生活に身を置くことで「心の豊かさ」に気付いてもらえるよう、心がけてきました。

受け入れた子どもたちが、家族を連れ、再訪してくれたことも。水引集落を中心に「つながり」の

裾野が、広がっていることを実感します。

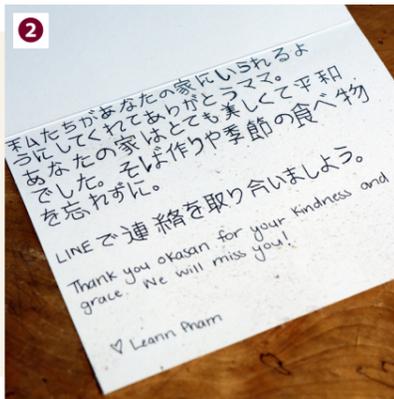
「つながり」を持って豊かに暮らす

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、私たちの生活は一変しました。行動は制限され、自粛や時短が求められる毎日。

感染拡大を防ぐために、必要な措置とはいえ、これまで築かれた人との「つながり」は、どんどん希薄になっていく。

しかし、困難な状況にあるからこそ「つながり」の大切さを再確認したい。そんな思いから、館岩地域を訪問しました。

今号では「つながり」を持って、豊かな暮らしを実践するお二人に焦点を当てました。



【写真①】

離騒館という名称は、文字どおり「喧騒を離れて、静かに過ごせるように」さらに「理想の場所になるように」2つの思いが込められています

【写真②】

海外の学生からの贈られた手紙。かけがえのない交流が、生きがいに



①

②



ふじわら木漆工房
藤原 啓祐さん (岩下)

水引集落から車を走らせること20分ほど。岩下区の小さな工房にたどり着きました。出迎えてくれたのは「ふじわら木漆工房」を営む藤原啓祐さん。
大阪府出身の藤原さんは、幼い頃から「木で何かを作る」ことが大好き。学生時代に漆芸を学び、大手家具メーカーに就職しますが「自分らしいモノづくりで、人を楽しませたい」と考え、独立。町に根付き、間もなく20年を迎えます。岩下区に工房を構えたのは、地元企業との「つながり」がきっかけ。木工教室の講師を務めたり、個展を開催して交流を深めたり。深い森に囲まれた山奥に、木の文化が

息づいている。「ここなら、無理なく自然にモノづくりができる」期待を寄せる自分がいました。
独立当初は、個展やコンペなどを意識したアート性の高い作品を手掛けていました。しかし、近所のお年寄りにアート性を説明しても、なかなか理解されません。田舎で生活する皆さんが求める要素は「実用的」なもの。当地域では、生活に深く関わる工芸品に対する関心が高く、重宝される

田舎暮らしの好影響で
作風も徐々に変化

活動の幅を広げるも
課題が浮き彫りに

水引集落では、これまで藤木良明さんが主宰する「山村集落再成塾」や、その後継団体「いろり」など、里山の再生・活性化を支援するNPO法人と連携し、都市と地方を結ぶ交流事業を継続してきました。

主な事業は、茅刈りツアー。参加者の皆さんに、茅葺き屋根の維持と、景観保全の一端を担っていただく枠組みです。観光の要素は薄く、野良仕事中心の内容であるにもかかわらず、楽しく作業する参加者の姿が。一見すると、交流事業は順調に進んでいるように思われました。しかし、そこには落とし穴も。

「水引集落」茅葺き屋根」というイメージを、抱く方も多はず。実際は、一般住宅と古民家住宅とが共存し、水引集落は成り立っています。交流事業の目的を十分に共有しないまま、取り組みを進めてきたために、集落内に温度差が生じてしまう結果に。
大きな反省を踏まえ、住民が協力し、意欲を持って、地域活性化に取り組みするためには、どうする



べきか。何から始めればよいか。話し合いを重ねました。これを契機に、冒頭でもご紹介した「さすけねえぶる南会津水引の里」が設立されます。

未来に向けた集落づくり
「さすけねえぶる」の精神

「さすけねえぶる」は、なじみ深い方言「さすけねえ」と、英語で「持続可能な」を意味する「サステイナブル」2つの言葉を、掛け合わせてできたもの。
高齢化が進む中で、水引集落が抱える諸課題―空き家継承、景観保全、住民福祉、マンパワー不足などに、真正面からぶつかろうとしても限界がある。決して無理を

ことを学びました。
現在では、受注をメインに対応し、食卓を彩るテーブルウェアを製作。木の温もりを生かした、誰もが使いやすい作品づくりに没頭されています。

ご縁を大切に
今日も工房へ

手彫りの工程は手間がかかり、大量生産もできません。ましてや、都市部のように、お客さんがすぐ立ち寄れる環境でもない。それでも生活が営めるのは「つながり」のおかげ。
宅配サービスが充実し、コミュニケーショントールも多岐にわたる現代。顔を合わせずとも、作り手の思いに込められる方がいる。その喜ぶ表情を想像しながら、心を込めて製作に励む自分がある。「自然と新しいご縁がつながっていくことが、一番の魅力やと思う」流暢な関西弁で話してくれた藤原さん。

全国各地で「働き方改革」が進められる中、モデルケースとなる豊かな暮らし方を、藤原さんの姿に垣間見たような気がします。



することなく、向こう50年間継続して、課題解消に取り組んでいく意識を共有するものです。
持続可能な集落の運営を目指す上で、外部との「つながり」を活用することは、有効な手段。
堰普請など、地区の活動を活用した交流ができないか。ヤマザクラやソバの花を生かした交流を考えられないか。テレワークの誘致や、クラウドファンディングによる資金調達を検討できないか。話し合いの中で、さまざまなアイデアが生まれています。
住民が手を取り合い、未来に向けた一歩を踏み出す。新たなスタートを切ったばかりの水引集落。山間の地から「つながり」は広がっていきます。

【写真 6】

木は、熱を通しにくく軽いため、年齢を問わず扱いやすい。藤原さん曰く「ええ感じのさわり心地」を追求しているそう

【写真 7】

手彫りの道具は、特別なものではなく、市販品を工夫して使う。バイオリン用のカンナなど、特徴ある道具もそろう